

証真の教学における三種三観について

松 本 知 己

一 問題の所在

智顛の最晩年の著作である『維摩經文疏』には、『法華經』を中心とする天台三大部とは異なる教義が少なからず見出される。⁽¹⁾ 別相三観・通相三観・一心三観から成る三種三観も、その一つである。中でも、問疾品から香積品までの所謂室内六品の観法とされる通相三観については、用語としては他の文献に見出されないだけでなく、智顛の説示も必ずしも意を尽くしたものとはいえないことから、その意義の解明が問題とされてきた。宝地房証真は、独自の学識をもって通相三観に関する研鑽を行っている。本論文は、証真による通相三観の取扱いを具体的に検討し、日本天台における受容の一形態を明らかにすると共に、通相三観という教義の意義、或いは問題点の一端を解明することを目的とするものである。

二 基本説の検討

先ずは、具体的に三種三観が説かれる『維摩經文疏』卷二一の記述を確認する。通相三観は、別教に属する別相三観、同じく円教の観法である一心三観と対比されつつ、次のように説明される。

二、通相三観者、則異於此。從仮入空非但知俗仮是空、真諦中道亦通是空也。若從空入仮非但知俗仮是仮、真空亦通是仮。若入中道正觀非但知中道是中、俗真通是中也。是則一空一切空無仮無中而不空。一仮一切仮無空無中而不仮。一中一切中無仮無空而不中。但以一觀当名解心無不通也。雖然此是信解虚通、就觀位除疾、不無患尽前後之殊別也。……此三種三観、初別相三観的在別教、歴別觀三諦也。若通相三観・一心三観的属円教也。今此經室内六品明三観、正是通相三観意、或用一心三観也。何以故知。初明從仮入空觀云、唯有空病、空病亦空。此語似空於中道也。又觀衆生品、從仮入空徹觀三諦。入文解釈、方見此意分明也。問。此兩観既並是円教。何意為兩。答曰、

通相三観約^レ通論^レ円。此恐是方等教帶^二方便^一之円、非^レ如^三法華所^レ明也。⁽²⁾

要するに、通相三観とは、例えば従仮入空観について、「一空一切空無^レ仮無^レ中而不^レ空」とあるように、空観では三諦全てが空であり、同様に仮観では三諦全てが仮、中観では三諦すべてが中であると知る観法である。こうした仕方が、『摩訶止観』巻五上に説示される総空観・総仮観・総中観⁽³⁾と近似性を有するものであるとしても、右に「信解虚通、就^二観位除^レ疾、不^レ無^三患尽前後之殊別^一也。」とあるように、通相三観では、行者の信解が三諦に及ぶことが重視され、断惑や行位においては、三観に前後があると規定される点に特色がある。このことは、通相三観における従仮入空観の行者について、「初観之者、雖^二如^レ此知、位行終在^二従仮入空観^一。不^レ可^下以^レ知^二中道空^一即已断^中無明^上也。」⁽⁴⁾と説示され、仮や中もまた空であると知ることが、直ちには断無明を意味しないと強調されることから看取しうる。ただし、こうした記述のみから、実践における行証の様相を直ちに理解することは困難であろう。ちなみに、『維摩経疏記』巻下における湛然の註釈を見ると、通相三観に断惑の前後がある理由については、「行相無^レ殊、従^レ教前後。故前文云^三恐是方等中意^一也。当^レ知、猶是方便之説。」⁽⁵⁾と述べ、行相は同一であるが、教によって断惑の前後があるとする。また、中道正観を修する行位につ

いて述べる箇所では、「円教等者、雖^レ属^二通相^一、復以^レ教分、円教永興故、以^二空観^一多属^二於通^一、入仮属^レ別、入中属^レ円。或円接別、或円接通、以^二方等中不^レ定判^一故、故云^二菩薩觀照等^一也。即淨名病与^レ物理同既專^二後心^一。驗知、即是本修^レ円人、前之^二観成既前後^一。雖^レ復亦云^二三空三仮^一、三空但破^二見思之惑^一、三仮但破^二塵沙之惑^一、虚解疎通、未^レ成^二実益^一。今之中観定空・仮並中。進退消^レ之、依^レ教準^レ部、無^レ令^レ失^レ旨。」⁽⁶⁾としている。つまり、前半部分では、空仮中の三観が、多くは通別円の三教に属するとし、後半部分では、三観が各個に三惑を破すべきことを確認している。なお、智顛は中道正観を修する行位について、三被接中、別接通のみに言及するのであり、⁽⁷⁾湛然はこれを受けて、円接別、円接通といった被接の人の行位に智顛が言及しない理由について、方等教中に定判がないためであると述べているのである。中国天台では、智顛が、この記述をもつて、通相三観が被接を基盤とするという所説の証文の一とする。⁽⁸⁾通相三観が後教への接続を予定する以上、行証の観点から被接と解すべき場合があることは問題なからうが、そこでは行位論が複雑な問題として立ち現れる。⁽⁹⁾智顛や湛然が、通相三観と被接との関係について積極的に言及していない以上、被接と通相三観を直結させる解の仕方、一つの可能性と見るべきかもしれず、証眞は他の説明方法をも示唆している。⁽¹⁰⁾いずれにせよ、証眞はやや異

なる問題意識から通相三観を取り扱っているものであり、以下、項を改めて具体的に検討する。

三 『法華経』以外の經典における円融三諦と通相三観

証真は、その著作中において、通相三観を主題として論ずることはないが、いくつかの重要な論点においては、通相三観の意義を問題としている。それは例えば、他経において円融三諦が明かされるか否か、という『法華玄義私記』巻一本における議論であり、論題としては、「爾前一心三観」が関連する。⁽¹¹⁾冒頭の問答を示せば、次のとおりである。

但為次第三諦所撰者、

問。他経亦明^二円融三諦^一耶。若云^レ明者、今云^二但為次第三諦所撰^一。淨名疏^レ以^二他経円^一名^二通相三観^一。若不^レ明者、諸文釈^二円融三諦^一、皆引^二他経^一。四教義云、他経明^二一心三諦^一。答。欲^レ知^二此義^一、先^レ了^二今昔^一円同異、次^レ了^二三諦^一也。⁽¹²⁾

『華嚴経』乃至般若經典を次第三諦の所撰とする『法華玄義釈義』巻一⁽¹³⁾の記述を釈する上で、右のような問が立てられている。波線部のように、『淨名疏』が通相三観を説示することは、『法華経』以外の經には円融三諦を認めない立場の論拠になっているのであり、通相三観を「他経に説示される円教」の観法と見る立場が存在したことが知られる。証真は、

証真の教学における三種三観について(松本)

前提論点として『法華経』と他経の円教の同異を解明した上で、他経における円融三諦の諸否を論ずるとしている。証真の教判論を理解する上では重要な箇所ではあるが、前提論点にはここでは立ち入らず、結論部分のみを示せば、「他経円教与^二法華円^一、有^レ同、有^レ異。若約^レ部論、雜^二偏教^一故、異^二開頭円^一。故云^二超八^一。若約^レ教論、別取^二円教^一、彼此円同故云^レ有^レ同。」⁽¹⁴⁾ということになる。すなわち、部の観点から見れば、純円の『法華経』と、権教が併せ説かれている他経とは異なるが、『法華経』と他経に説かれる円教自体を見れば同価値であるというのが基本的な立場である。証真は、これと同様の論理をもって、他経における円融三諦についても肯定するのであり、右に引用した、他経の円(観)≡通相三観とする立場に対しては、次のような問答を行っている。

問。若今昔円同円融者、何故他経円名^二通相三観^一、不^レ名^二一心^一。答。通相三観者、室内六品、三観之相未^二是純円^一、文含^二權教^一、通明^レ円故名^二通相^一。謂、方等座、教機未^レ純。以^二機雜^一故、教亦未^レ純。故彼三観猶是覆相。故以^二空^一・假^一亦属^二通^一・別^一、亦明^二別相^一。淨名玄云、觀衆生品通^二円^一二教徒仮入空、仏道品別^一・円入仮、不二品正明^二円中道^一云。当^レ知、帶^レ權凡有^二二義^一。一者、部兼帶。謂、一章中純説^二円頓^一、余章明^レ權故名^二兼帶^一。作^二与奪義^一、扱^レ此而説。二者、文兼帶。謂、於^二一文^一帶^レ權明^レ円。彼円非^二今之所論^一也。⁽¹⁵⁾

傍線部のように、通相三観とは、証真の理解では、機根が

多様であることから、教もまた未純である方等教の会座の中でも、特に『維摩経』の室内六品に説示される三観のことである。経文に権教を含みつつ、通惣して円教を明らかにすることから、通相と呼ぶと述べている。つまり、通相三観を説く室内六品の経文は、他経における円教一般を意味するものではないため、問の立場の主張は、そもそも自説への批判とはならないとするのである。そして、『維摩経』における三観の分類については、次のように述べている。

且浄名経明^三円三観^一有^二此二文^一。一者、純円。謂、菩薩品以^レ円弾^レ偏。呵^レ光嚴^一云、一念知^二一切法^一。是為^レ坐^レ道場。成^レ就一切智^一故。諸文引^レ此、証^二一心三観^一。若含^二偏教^一、不^レ成^レ彈^レ偏。二者、帶權。謂、室内三観文不^二分明^一。故名^二通相^一。若唯法華明^二一心^一者、何故又云^三室内亦明^二一心三観^一。彼疏明三種三観云……今室内六品正是通相。或用^二一心^一。何以知^レ然。初從仮入空観云^下唯有^二空病^一、空病亦空^上。此似^レ空^三於中道^一。又観衆生品從仮入空観、徹^二観三諦^一。入^レ文方^レ見。問。此等三観既並是円。何以為^レ兩。答。通相約^レ通論^レ円。恐是方等帶方便円。不^レ同^二法華^一。明^レ知、菩薩品明^二純円一心三観^一。故得^レ引^レ之。而云^二或用一心者、仏意難^レ測。或正意通相、或正意一心。故作^二二解^一。広疏云、正意或用^二一心三観^一。又浄名玄第二、以^二室内三観^一為^二別相三観^一。即問云、室内既正明^二不思議^一。何得^二別相三観^一以^レ通^二諸品^一也。答。経文一往似^下約^二別相三観^一而説^上、細尋^二意趣^一、悉入^二一心中道^一也。^上已

円教の三観として、菩薩品における純円の一心三観と、室

内における帶權、すなわち通相三観を挙げる点に問題はないとしても、傍線部の、室内における一心三観については、『維摩経略疏』卷七の「今室内六品正是通相。或用^二一心^一。」という記述に関して、やや不明確な議論を行っている。現行の『維摩経文疏』卷二（前引）には、証真が「広疏云」として引用する記述、すなわち正意を一心三観とする記述は見出されないのである。このことと、室内六品を三観に分別して積する仕方が実には一心中道に通ずるとする『維摩経玄疏』卷二の文の引用を併せ考えれば、室内でも一心三観を正意とする結論を導出し、最終的には、『法華経』以外でも円融三諦を明かすと解する説を補強する意図が見える。そうだとすれば、『維摩経』解釈において通相三観の有する意義は、やや限定的に理解されているといえよう。

四 一心三観と通相三観

一心三観によって、見思・塵沙・無明の三惑が同時に断ぜられるか、順次に断ぜられるか、すなわち「三惑同断」の論題で知られる議論については、通説が一向に同時断と解するのに対し、同時断・異時断の両義を立てる証真の説は異説とされること、後世では専ら異時断の義のみが注目され、批判されること等については、既に論じた。¹⁹ 通相三観が問題となるのは、「遮^二外難^一」のうち第一の「遮^二文難^一」中の問答で

あり、具さに引用すれば、次のとおりである。

問。浄名疏明「通相三観」云、就「観除」疾、不「無」前後云。故知、一心三観同除「三惑」。

答。①「一心三観通治」三惑。通相三観各治「一惑」。故云「就観除疾有前後」也。涅槃疏云、一空一切空三諦皆空。此観破「五住惑」。仮中亦爾。略抄 暹記云、或人用「空観」断「三惑」。乃至或人只用「中観」断「三惑」。取意……②「通相三観以「空属」通、但破「見思」。以

「仮属」別、但破「塵沙」。以「中属」円、破「無明」。故約「此次第一云」前後断。又以「三観」並属「別」。故明「次第断」。故妙樂記云、通相・一心的在円者、問。那云「断惑終成」前後「耶」。答。行相無「殊」、従「教前後」。故前文云、恐是方等中意也。当「知」、猶是方便之説。暹記云、形相無「殊」者、通相及「一心三観行相」也。従「教前後者」、一、属「衍門」故。二、順「別故」。③私云、属「衍門」故者、以「空・仮・中」对「三教」故。

通相三観の断惑には前後があるという規定のいわば反対解釈によつて、一心三観は同時に三惑を断ずるとするのが問の立場である。証真の教学では、たとえ一心三観であっても、断惑を論ずる場合には、三惑が異時に断ぜられると解する。したがつて、ここでは、断惑の順序ではなく、一心三観と通相三観の観法それ自体の質的相違を強調する論述がなされるのである。すなわち、傍線部①のように、同じく「一空一切空」をいうとしても、一心三観では、三観が通じて三惑を断ずるが、通相三観は、一観が各々一惑を断ずるに過ぎないことを、『涅槃経疏』卷二四及び道暹『涅槃経疏私記』卷七の

証真の教学における三種三観について（松本）

記述によつて論証する。そして、傍線部②のように、通相三観では、空・仮・中の三観が各々、通・別・円の三教に属することから、これを前後断の義とし、証文として、湛然の『維摩経疏記』卷下と、道暹の『維摩経疏記鈔』（古佚部分）の文を引用し、傍線部③のように、道暹の註釈に補足している。これは内容的には傍線部②と同様である。つまり、湛然の説のうち、「行相無「殊」」の部分ではなく、「従「教前後」」の部分に重点をおいた解釈がなされ、同じく円教に属するとしても、一心三観よりは、むしろ別相三観に近い観法という側面が強調されているのである。

五 小結

以上、証真による通相三観の取扱いについて若干の検討を行った。証真は、『維摩経略疏』を中心に、智顛の所説は勿論、湛然や道暹の註釈等を基盤として通相三観に関する自説を構築している。その上で、円融三諦や一心三観といった重要教義との対比を通じて、自己の教学を明確化するために活用するのである。他方、通相三観の実践に伴う問題点等については、積極的に独自の考察を行うことはなく、その意味では、やや形式的な理解を示している。また、通相三観と被接との関連についてはほとんど言及がなされず、智円などの議論とは、方向性が異なるというべきである。なお、証真以降の日

本天台でも、他経における一心三観を論ずる上で、通相三観の意義が検討されている。例えば口伝法門では、通相三観と被接との関連性が様々に吟味されているようであり、今後、通相三観については、中国・日本における受容の形態を、より精密に検討する作業が必要になると考える。

- 1 この点について、大久保良峻「『維摩経文疏』の教学」(『台密教学の研究』所収)、及び、青木隆「『維摩経文疏』における智顛の四土説について」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊一一)参照。
- 2 統蔵一一二八・一一六丁左下―一一七丁右上。
- 3 大正四六・五五頁中。この点につき、野本覚成「二つの三種三観」(『印仏研』二五―二六)、同「三種三観の成立」(『印仏研』二六―二七)、参照。
- 4 統蔵一一二八・一一八丁左下。
- 5 統蔵一一二八・四一〇丁左上下。
- 6 統蔵一一二八・四二一丁左下。
- 7 統蔵一一二八・二二二丁左下。
- 8 『維摩経略疏垂裕記』卷九。大正三八・八二一頁上。「請、観、荊溪所釈。既以通相中観約円接義一釈之。驗前空仮亦約円接、此為対教故、未論之。若謂不然、豈得云通相的属円耶。」とある。先行研究は、通相三観を被接との関連性で説明するものが多い。例えば、野本前掲論文の他、浜田智純「通相三観について」(『天台学报』一八)など。最近では、山口弘江「通相三観の成立に関する一考察―智顛の『維摩経』解釈との関連から―」(『東アジア仏教研究』七)も、こうした立場を踏襲するようである。
- 9 被接に関する諸問題点について、大久保良峻「日本天台における被接説の展開―基本的事項を中心に―」(『天台教学と本覚思

- 想』所収)参照。
- 10 証真は、『維摩経文疏』卷二〇(統蔵一一二八・一〇七丁左下―一〇八丁右上)における、中道正観の断惑論について、その説示を、円接通に関するものとしつつ、『維摩経疏記』卷下(統蔵一一二八・四〇九丁右上)における湛然の註釈を踏まえることで、被接ではなく、『四念処』卷二(大正四六・五六三頁中)所説の通円の人に関する記述と理解すべき可能性を指摘している。『止観私記』卷三本、仏全二二・八九四頁下―八九五頁上、参照。
- 11 証真に先行する議論としては、『三観義私記』(仏全三二・二九九頁下―三〇一頁上)参照。簡潔な構成ではあるが、証真説と同様の見解である。
- 12 仏全二一・六頁上。
- 13 大正三三・八一―九頁中。
- 14 仏全二一・六頁下。
- 15 仏全二一・一〇頁上。
- 16 仏全二一・一〇頁上下。
- 17 大正三八・六六一頁下―六六二頁上。
- 18 大正三八・五三二頁上。
- 19 拙稿「宝地房証真の断惑論」(『東洋の思想と宗教』二三)参照。
- 20 仏全二一・二〇六頁下―二〇七頁上。
- 21 大正三八・二七九頁下。
- 22 統蔵一一二八・一三六丁右上。
- 23 統蔵一一二八・四一〇丁左上下。
- 24 一例として、『等海口伝抄』卷一「通相三観事」(天全九・三五三頁上―三五四頁上)参照。ここでは、円仁撰とされる『法華迹門観心絶待釈』(仏全二四・六六頁上下)に依って通相三観を三被接に配当する。さらに心賀の義を用いて、通相を「法通相」、「機通相」に分別し、前者を、一空一切空等、能説の法が三観に通じていること、後者を、彈呵されて法を信解する四教の機と説明している。

〈キーワード〉 三種三観、通相三観、一心三観、被接、『維摩経文疏』

(早稲田大学文学学術院非常勤講師・博士(文学))